

【B年】聖霊降臨節第10主日(2023年7月30日)

【旧約聖書日課】列王記上19章(1~8節)9~21節

¹アハブは、エリヤの行ったすべての事、預言者を剣で皆殺しにした次第をすべてイゼベルに告げた。²イゼベルは、エリヤに使者を送ってこう言させた。「わたしが明日のこの時刻までに、あなたの命をあの預言者たちの一人の命のようにしていなければ、神々が幾重にもわたしを罰してくださるよう。」

³それを聞いたエリヤは恐れ、直ちに逃げた。ユダのベエル・シェバに来て、自分の従者をそこに残し、⁴彼自身は荒れ野に入り、更に一日の道のりを歩き続けた。彼は一本のえにしだの木の下に来て座り、自分の命が絶えるのを願って言った。「主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください。わたしは先祖にまきる者ではありません。」⁵彼はえにしだの木の下で横になって眠ってしまった。御使いが彼に触れて言った。「起きて食べよ。」⁶見ると、枕もとに焼き石で焼いたパン菓子と水の入った瓶があったので、エリヤはそのパン菓子を食べ、水を飲んで、また横になった。⁷主の御使いはもう一度戻って来てエリヤに触れ、「起きて食べよ。この旅は長く、あなたには耐え難いからだ」と言った。⁸エリヤは起きて食べ、飲んだ。その食べ物に力づけられた彼は、四十日四十夜歩き続け、ついに神の山ホレブに着いた。

⁹エリヤはそこにあった洞穴に入り、夜を過ごした。見よ、そのとき、主の言葉があった。「エリヤよ、ここで何をしているのか。」¹⁰エリヤは答えた。「わたしは万軍の神、主に情熱を傾けて仕えてきました。ところが、イスラエルの人々はあなたとの契約を捨て、祭壇を破壊し、預言者たちを剣にかけて殺したのです。わたし一人だけが残り、彼らはこのわたしの命をも奪おうとねらっています。」¹¹主は、「そこを出て、山の中で主の前に立ちなさい」と言われた。見よ、そのとき主が通り過ぎて行かれた。主の御前には非常に激しい風が起り、山を裂き、岩を砕いた。しかし、風の中に主はおられなかった。風の後に地震が起こった。しかし、地震の中にも主はおられなかった。¹²地震の後に火が起こった。しかし、火の中にも主はおられなかった。火の後に、静かにささやく声が聞こえた。¹³それを聞くと、エリヤは外套で顔を覆い、出て来て、洞穴の入り口に立った。そのとき、声はエリヤにこう告げた。「エリヤよ、ここで何をしているのか。」¹⁴エリヤは答えた。「わたしは万軍の神、主に情熱を傾けて仕えてきました。ところが、イスラエルの人々はあなたとの契約を捨て、祭壇を破壊し、預言者たちを剣にかけて殺したのです。わたし一人だけが残り、彼らはこのわたしの命をも奪おうとねらっています。」¹⁵主はエリヤに言われた。「行け、あなたの来た道を引き返し、ダマスコの荒れ野に向かえ。そこに着いたら、ハザエルに油を注いで彼をアラムの王とせよ。¹⁶ニムシの子イエフにも油を注いでイスラエルの王とせよ。またアベル・メホラのシャファトの子エリヤにも油を注ぎ、あなたに代わる預言者とせよ。¹⁷ハザエルの剣を逃れた者をイエフが殺し、イエフの剣を逃れた者をエリヤが殺すであろう。¹⁸しかし、わたしはイスラエルに七千人を残す。これは皆、バアルにひざまずかず、これに口づけしなかった者である。」

¹⁹エリヤはそこをたち、十二軛の牛を前に行かせて畑を耕しているシャファトの子エリヤに出会った。エリヤは、その十二番目の牛と共にいた。エリヤはそのそばを通り過ぎるとき、自分の外套を彼に投げかけた。²⁰エリヤは牛を捨てて、エリヤの後を追いつ、わたしの

父、わたしの母に別れの接吻をさせてください。それからあなたに従います」と言った。エリヤは答えた。「行って来なさい。わたしがあなたに何をしたというのか」と。²¹エリヤはエリヤを残して帰ると、一軛の牛を取って屠り、牛の装具を燃やしてその肉を煮、人々に振る舞って食べさせた。それから彼は立ってエリヤに従い、彼に仕えた。

【使徒書日課】ペトロの手紙一3章13~22節

¹³もし、善いことに熱心であるなら、だれがあなたがたに害を加えるでしょう。¹⁴しかし、義のために苦しみを受けるのであれば、幸いです。人々を恐れたり、心を乱したりしてはいけません。¹⁵心の中でキリストを主とあがめなさい。あなたがたの抱えている希望について説明を要求する人には、いつでも弁明できるように備えていなさい。¹⁶それも、穏やかに、敬意をもって、正しい良心で、弁明するようになさい。そうすれば、キリストに結ばれたあなたがたの善い生活をする者たちは、悪口を言ったことで恥じ入るようになるのです。¹⁷神の御心によるのであれば、善を行って苦しむ方が、悪を行って苦しむよりはよい。¹⁸キリストも、罪のためにただ一度苦しみました。正しい方が、正しくない者たちのために苦しまれたのです。あなたがたを神のもとへ導くためです。キリストは、肉では死に渡されましたが、霊では生きる者とされたのです。¹⁹そして、霊においてキリストは、捕らわれていた霊たちのところへ行って宣教されました。²⁰この霊たちは、ノアの時代に箱舟が作られていた間、神が忍耐して待っておられたのに従わなかった者です。この箱舟に乗り込んだ数人、すなわち八人だけが水の中を通過して救われました。²¹この水で前もって表された洗礼は、今やイエス・キリストの復活によってあなたがたをも救うのです。洗礼は、肉の汚れを取り除くことではなくて、神に正しい良心を願い求めることです。²²キリストは、天に上って神の右におられます。天使、また権威や勢力は、キリストの支配に服しているのです。

【福音書日課】ルカによる福音書9章51~62節

⁵¹イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた。⁵²そして、先に使いの者を出された。彼らは行って、イエスのために準備しようと、サマリア人の村に入った。⁵³しかし、村人はイエスを歓迎しなかった。イエスがエルサレムを目指して進んでおられたからである。⁵⁴弟子のヤコブとヨハネはそれを見て、「主よ、お望みなら、天から火を降らせて、彼らを焼き滅ぼしましょうか」と言った。⁵⁵イエスは振り向いて二人を戒められた。⁵⁶そして、一行は別の村に行った。

⁵⁷一行が道を進んで行くと、イエスに対して、「あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」と言う人がいた。⁵⁸イエスは言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない。」⁵⁹そして別の人に、「わたしに従いなさい」と言われたが、その人は、「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と言った。⁶⁰イエスは言われた。「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。あなたが行って、神の国を言い広めなさい。」⁶¹また、別の人も言った。「主よ、あなたに従います。しかし、まず家族にいとまごいに行かせてください。」⁶²イエスはその人に、「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない」と言われた。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

列王記上 19章1～21節

1アハブはエリヤの行ったすべてのこと、すなわち預言者たちが皆、剣で刺された事の次第をイゼベルに話した。2イゼベルはエリヤに使いを送ってこう言った。「私が明日の今頃までに、あなたの命を、あの預言者たちの一人の命のようにしてなければ、神々が私を幾重にも罰してくださるように。」3それを聞いたエリヤは恐れを抱き、命を守ろうと直ちに逃れて、ユダのベエル・シェバに行き着いた。そして従者をそこに残し、4彼自身は荒れの中を一日の道のりほど歩き続け、一本のえにしだの木の下にたどりついて座った。エリヤは自分の命が絶えるのを願って言った。「主よ、もうたくさんです。私の命を取ってください。私は先祖にまさってなどいないのですから。」5彼は一本のえにしだの木の下で横になって眠った。すると御使いが彼に触れて言った。「起きて食べなさい。」6見ると、頭のところには石焼きのパン菓子と水の入った水差しがあった。エリヤは食べて飲み、もう一度横になった。7すると、主の御使いがもう一度エリヤに触れ、「起きて食べなさい。この道のりは耐え難いほど長いだから」と言った。8エリヤは起きて食べ、そして飲んだ。その食べ物で力をつけた彼は、四十日四十夜歩き続け、神の山ホレブに着いた。

9エリヤはそこにあった洞穴に入り、夜をそこで過ごした。すると主の言葉が臨んで、「エリヤよ、あなたはここで何をしているのか。」と言われた。10エリヤは答えた。「私は万軍の神、主に熱心に仕えてきました。ところが、イスラエルの人々はあなたとの契約を捨て、祭壇を壊し、預言者たちを剣にかけて殺しました。ただ私だけが一人残ったのですが、彼らはこの私の命をも奪おうとねらっています。」11主は言われた。「出て来て、この山中で主の前に立ちなさい。」主が通り過ぎて行かれると、主の前で非常に激しい風が山を裂き、岩を砕いた。しかし、その風の中に主はおられなかった。風の後に地震があった。しかし、その地震の中に主はおられなかった。12地震の後に火があった。しかし、その火の中に主はおられなかった。火の後に、静かにささやく声があった。13それを聞くにエリヤは外套で顔を覆い、出て来て、洞穴の入り口に立った。そのとき、声はエリヤにこう告げた。「エリヤよ、ここで何をしているのか。」14エリヤは答えた。「私は万軍の神、主に非常に熱心に仕えてきました。ところが、イスラエルの人々はあなたとの契約を捨て、祭壇を壊し、預言者たちを剣にかけて殺しました。ただ私だけが一人残ったのですが、彼らはこのわたしの命をも奪おうと狙っているのです。」

15主はエリヤに言われた。「来た道を引き返し、ダマスコの荒れ野に向かいなさい。そこに着いたら、ハザエルに油を注いで彼をアラムの王としなさい。16また、ニムシの子イエフに油を注いで、イスラエルの王としなさい。さらに、アベル・メホラのシャファトの子エリヤに油を注ぎ、あなたに代わる預言者としなさい。17ハザエルの剣を逃れた者はイエフが殺し、イエフの剣を逃れた者はエリヤが殺すであろう。18わたし七千人をイスラエルに残す。すべて、バアルに膝をかがめず、これに口づけしなかった者である。」

19エリヤはそこを去って行くと、シャファトの子エリヤがいるのを見かけた。エリヤは十二軛の牛を前に畑を耕していたが、彼は十二番目の牛と共にいた。エリヤはそのそばを通り過ぎるとき、自分の外套をエリヤに投げかけた。20するとエリヤは、牛を打ち捨て、エ

リヤの後を追ひ、「どうか父と母に別れの口づけをさせていただきます。それからあなたに従います」と言った。エリヤは、「行って来なさい。私があるに何をしようのか」と答えた。21エリヤはエリヤを残して帰ると、一軛の牛を引いて来て屠り、牛の軛を燃やしてその肉を調理し、人々に振る舞って食べさせた。それから彼は立ってエリヤに従ひ、彼に仕えた。

ペトロの手紙一 3章13～22節

13もし、善いことに熱心であるなら、誰があなたがたに害を加えるでしょう。14しかし、義のために苦しみを受けることがあっても、あなたがたは幸いです。彼らを恐れたり、心を乱したりしてはなりません。15ただ、心の中でキリストを主と崇めなさい。あなたがたの抱いている希望について説明を求めるときには、いつでも弁明できるように備えていなさい。16それも、優しき、敬意をもって、正しい良心で、弁明しなさい。そうすれば、キリストにあるあなたがたの善い振る舞いを罵る者たちは、悪口を言ったことで恥じ入るようになります。17神の御心によるのであれば、善を行って苦しむ方が、悪を行って苦しむよりはよいのです。18キリストも、正しい方でありながら、正しくない者たちのために、罪のゆえにただ一度苦しみました。あなたがたを神のもとへ導くためです。キリストは、肉では殺されましたが、霊では生かされたのです。19こうしてキリストは、捕らわれの霊たちのところへ行って宣教されました。20これらの霊は、ノアの時代に箱舟が造られていた間、神が忍耐して待っておられたのに従わなかった者たちのことです。僅か八名だけが、この箱舟に乗り込み、水を通過して救われました。21この水は、洗礼を象徴するものであって、イエス・キリストの復活によって今やあなたがたをも救うのです。洗礼は、肉の汚れを取り除くことではなく、正しい良心が神に対して行う誓約です。22キリストは天に昇り、天使たち、および、もろもろの権威や力を従えて、神の右におられます。

ルカによる福音書 9章51～62節

51天に上げられる日が満ちたので、イエスはエルサレムに向かうことを決意された。52それで、先に使いの者をお遣わしになった。彼らは出かけて行って、イエスのために準備を整えようと、サマリア人の村に入った。53しかし、サマリア人はイエスを歓迎しなかった。イエスがエルサレムに向かって進んでおられたからである。54弟子のヤコブとヨハネはこれを見て言った。「主よ、お望みなら、天から火を下し、彼らを焼き滅ぼすように言いまししょうか。」55イエスは振り向いて、二人をお叱りになった。56そして、一行は別の村に行った。

57彼らが道を進んで行くと、ある人がイエスに、「あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」と言った。58イエスは言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない。」59そして別のの人に、「私に従いなさい」と言われたが、その人は、「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と言った。60イエスは言われた。「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。しかし、あなたは行って、神の国を告げ知らせなさい。」61また、別の人も言った。「主よ、あなたに従います。しかし、まず家の者たちに別れを告げることを許してください。」62イエスはその人に、「鋤に手をかけてから、後ろを振り返る者は、神の国にふさわしくない」と言われた。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・7月30日「聖霊降臨節第10主日」の日課主題は「苦難の共同体」。

・旧約聖書日課は、「列王記上」から、エリヤ物語の中でエリヤが王妃イゼベルに追われてホレブ山に逃れたときの逸話箇所。使徒書日課は、「ペトロの手紙一」から、苦しみを受けることの意味を説く箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、エルサレムに向かうことを決意された主イエスがサマリア地方を通過して歩みを進めて行かれたことを描く箇所。

旧約日課(列王上 19章より)

・「列王記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「前の預言者」の第四に置かれた歴史物語文書。便宜上、上下巻に分けられているが、元来は一卷本として編纂されている。正典「前の預言者」は、モーセからイスラエルの民を引き継いだヨシュアが民をカナンに定住させたことから始まり、士師の時代、王国時代を経て、南北両王国が滅亡、バビロン捕囚によってカナンの地における拠点を失うまでのイスラエルの歴史を扱う。「列王記」は、ダビデ王からユダ・イスラエル連合王国を継承したソロモン王の時代から王国分裂、両王国滅亡までを「王の年代記」の様式によって物語っている。しかし、「列王記」は、正典「前の預言者」の枠組みの中で扱われているように、物語の陰の主要人物として「預言者」が描かれている。その「預言者」の一人が「エリヤ」であり、「エリヤ」の後継者として描かれる「エリシャ」である。日課箇所は、「エリヤ物語」として構成される中に含まれる一逸話で、王妃イゼベルに追われたエリヤがホレブ山に逃れ、そこで神からの新しい召命を受けた場面。

・「エリヤ物語」は、「列王記」中でまとまった分量を占めるが、必ずしも「預言者エリヤの一代記」としてのまとまりがあるわけではなく、「預言者エリヤ」に関する諸々の逸話を寄せ集めたものに過ぎない。それは、「サムエル記」における「預言者サムエル」が、その誕生から死までを描かれているのとは対照的である。「サムエル記」における「サムエル」は、元来、「サウル王とダビデ王の物語」に不可欠の人物として物語に組み込まれていたと考えられるが、「列王記」における「エリヤ」は、王宮で受け継がれたであろう「王の年代記」とは別の、「預言者エリヤ伝説」とでも言える民間伝承群を資料として、適宜逸話物語を挿入する形で描かれているのだろう。「エリヤ」の後継者として続いて描かれていく「エリシャ」と比較しても、「エリヤ」に関する背景情報は限られており、おそらく、「エリシャ」の物語を正当化するために、伝説的な預言者「エリヤ」の物語を半ば強引に組み立てていると考えられる。

・日課箇所は、「列王記」中の「エリヤ物語」の展開としてはすでに中盤として位置づけられており、「預言者の召命物語」としては収まりが悪い。

・3節「ベエル・シェバ」は、「創世記」の族長物語で繰り返し現れる地名であり、「サムエル記」および「列王記」の王国物語中では、ユダ・イスラエル王国の南端領域を示す地として挙げられる(王上 5:5 など)。エリヤがこの地まで来て、さらに一人歩き続けたということは、彼がすでにユダ・イスラエルの両王国の王たちの支配領域外に身を置いていることを意味する。そして、その先にあるとされているのが、「神の山ホレブ」(8節)である。「ホレブ」は、「モーセ物語」中で「柴の箇所」と呼ばれる「モーセ召命物語」の場面として描かれる山で、通説では「シナイ山」と同一と考えられている。いずれにしても、この逸話によって、出自や帰属のはっきりしない「預言者エリヤ」が、族長(アブラハム～ヤコブ)やモーセと結びつけられ、その正統性を示唆されていることは確かだろう。

・15節以下でエリヤに示される「主の召命」内容は、「エリヤ物語」内で回収されず、続く「エリシャ物語」の伏線となっている。つまり、これらは、「エリシャ物語」における「預言者エリシャ」の活動を正当化するために示された事柄である。

使徒書日課(Ⅰペトロ 3章より)

・「ペトロの手紙一」は、新約正典中「公同書簡」と呼ばれてきた書簡文書の一つで、「使徒ペトロ」の名でアナトリア半島各地の信徒に宛てたものとして作成されている。

・本書簡は、主イエスを直接知らずにキリストに従う信仰に入った人々に向けて、キリスト者としての生き方を説く内容となっている。そのため、伝統的には、「洗礼教育」で頻りに用いられてきた。説かれるキリスト者としての生き方の基本は、「キリストが苦しみを受けられたように、キリストに従う者も苦しみを受けることをよしとして生きるように定められている」ということにある。著者の考えによれば、キリストが苦しまれたのは、弟子たちをはじめとする人々が救いへと導かれるためであり、同様にキリストに従う者たちは、まだ救いへと導かれていない者たちが救いへと導かれるために、苦しみを引き受けなければならぬのである。このような救済論の背景には、「イザヤ書」53章で描かれる「苦難の主の僕」を予型とするキリスト像がある(2:21~24など参照)。

・日課箇所では、キリストが「苦しみを受ける」ことの結果として「死に渡された」のは、「死者のもとに行って宣教するため」という理解が展開されている。この議論は、洗礼を受けずに死んだ者の救いの問題でしばしば取り上げられる典拠となっている。

・同時に、キリストが「死者のもとに行って宣教された」ことは、「死者を引き上げる」という点において「洗礼論」と結びついて展開されている。ここで「洗礼」は、「ノアの洪水物語」を予型として解釈されており、「洗礼を受けた者の教会」を「箱舟」に譬える論拠とされてきた。もともと、そのような譬えで厳密に考えるならば、「洗

礼を受けずに死んだ者」は、「箱舟」に乗れずに水の中に沈んでしまった者であり、「救われない」という結論を与えられることになるかもしれない。しかし、本書簡は、後段であらためて「死んだ者にも福音が告げ知らされた」(4:6)という「キリストの死者に対する宣教」論を提示しており、「生前の洗礼」によらない霊的な救い(としての洗礼)を想定していると考えられる。

福音書日課(ルカ 9 章より)

・日課箇所は、主イエスがエルサレムに向かわれる決意をされたことを示し、その最初の一歩としてサマリア地方を通られた折の逸話を描く箇所、また弟子としての心構えを教える箇所。後半の箇所は「マタイ」に並行箇所が見られるが、前半の箇所は「ルカ」特有の逸話である。

・「ルカ文書」は、「サマリア人」をどちらかと言えば友好的に描いている。「サマリア人」は、「ユダヤ人」と同じ宗教的ルーツを持つと考えられながら、対立的に並存してきた集団。前 2 世紀までは「ゲリジム山」上に独自の神殿を持ち、「エルサレム神殿派」である「ユダヤ人」の枠組みに取り込まれることを拒んできた。ゲリジム山の神殿は、前 2 世紀のマカベア戦争後に成立したユダヤ人の王国「ハスモン王朝」のヨハネ・ヒルカノス王(名目上は祭司)による軍事侵攻によって破壊されたが、サマリア人は、それ以後もゲリジム山上の神殿廃墟で祭儀を続け、今日に至っている。初期教会にとって、サマリア人を共同体に加えることは、既存の「ユダヤ人」の枠組みを超える象徴的な意味があった。

・57 節以下は、通例「弟子の覚悟」という主題で扱われてきた。しかし、「ルカ福音書」は、54~55 節で主イエスが生真面目すぎる弟子たちの態度を戒められたとしており、(マタイとは違って)、弟子の一時的な熱心さをむしろ戒め、静めさせる意図で教えられたものとしてここに置いているのかもしれない。

来週の誕生日 (7 月 30 日～8 月 5 日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-4 番「世にあるかぎりの」(= I 62)は、C.ウェスレー(18 世紀英国)の代表的な讃美歌で、彼が自身の回心経験を記念して作詞した。曲は、19 世紀初めにドイツで活躍した音楽家 C.G.グレーザーの曲を 19 世紀米国の教会音楽家 L.メーンソンが編曲したものの。1954 年版の曲は日本版独自のもの。
- ・21-59 番「この地を造られた」は、20 世紀英国会衆派牧師 R.T.ブルックスの作詞、同じく会衆派教会音楽家 P.カッツの作曲。英国聖書協会創立 150 周年記念事業の中で生まれた讃美歌。
- ・21-443 番「冠も天の座も」(I 124「みくにをも宝座をも」)は、19 世紀英国教会司祭の娘エミリ・エリオットが、父の牧する聖マルコ教会の聖歌隊のために作詞。曲は、別の讃美歌集への採用に際して、この歌詞のためにマッシュューズが作曲。

21-4「世にあるかぎりの」

O for a thousand tongues to sing

1. Oh, for a thousand tongues to sing / My great Redeemer's praise, / The glories of my God and King, / The triumphs of his grace!
2. My gracious Master and my God, / Assist me to proclaim, / To spread through all the earth abroad, / The honors of your name.
3. The name of Jesus calms our fears / And bids our sorrows cease. / 'Tis music in the sinners ears; / 'Tis life and health and peace.
4. He breaks the pow'r of canceled sin; / He sets the pris'n'er free. / His blood can make the foulest clean; / His blood avails for me.
5. See all your sins on Jesus laid; / The Lamb of God was slain. / His life was once an off'ring made / That you might live again.
6. Glory to God and praise and love / Be ever, ever giv'n / By saints below and saints above, / The Church in earth and heav'n.

21-59「この世を造られた」

Thanks to God whose Word was spoken

- 1 Thanks to God whose word was spoken / in the deed that made the earth. / His the voice that called a nation, / his the fires that tried her worth. / God has spoken: / praise him for his open word.
- 2 Thanks to God whose Word Incarnate / glorified the flesh of man; / deeds and words and death and rising / tell the grace in heaven's plan. / God has spoken: / praise him for his open word.
- 3 Thanks to God whose word was written / in the Bible's sacred page, / record of the revelation / showing God to every age. / God has spoken: / praise him for his open word.
- 4 Thanks to God whose word is published / in the tongues of every race. / See its glory undiminished / by the change of time or place. / God has spoken: / praise him for his open word.
- 5 Thanks to God whose word is answered / by the Spirit's voice within. / Here we drink of joy unmeasured, / life redeemed from death and sin. / God is speaking: / praise him for his open word.

21-443「冠も天の座も」

Thou didst leave Thy throne

1. Thou didst leave thy throne / And thy kingly crown / When thou camest to earth for me, / But in Bethlehem's home / Was there found no room / For thy holy nativity: / O come to my heart, Lord Jesus; / There is room in my heart for thee.
2. Heaven's arches rang / When the angels sang, / Proclaiming thy royal degree; / But of lowly birth / Didst thou come to earth, / And in great humility: / O come to my heart, Lord Jesus, / There is room in my heart for thee.
3. The foxes found rest / And the birds their nest / In the shade of the forest tree; / But thy couch was the sod, / O thou Son of God, / In the deserts of Galilee: / O come to my heart, Lord Jesus, / There is room in my heart for thee.
4. Thou camest, O Lord, / With the living word, / That should set thy people free; / But with mocking scorn, / And with crown of thorn, / They bore thee to Calvary: / O come to my heart, Lord Jesus, / There is room in my heart for thee.
5. When the heavens shall ring, / And the angels sing / At thy coming to victory, / Let thy voice call me home, / Saying 'Yet there is room, / There is room at my side for thee; / And my heart shall rejoice, Lord Jesus, / When thou comest and callest for me.